

小笠原諸島に見る言語接触の重層化

ダニエル・ロング (Daniel Long)

一七〇年ほどの間にアメリカ人をはじめとする西洋人、太平洋諸島の人々、そして日本人が混住し、統治状況に応じてマジヨリティ・グループも入れ替わった小笠原諸島。歴史の大波に揺れる中で、独自の混合言語を発達させた言語接触のあり方を探る。

2007.9 月刊言語

一 はじめに

小笠原諸島では、その短い歴史の中で、言語接触が絶えず繰り返されている。その結果複数の接触言語変種が生まれてきた。一七〇年余りの間に、入植者がこの島に持ち込んだ言語は、英語をはじめとするヨーロッパ諸言語、オーストロネシア語族の諸言語、そして日本各地の方言であった。これらが複雑に交じり合って、小笠原独特の接触変種の原材料となった。島生まれの言語体系には、小笠原ビジン英語、小笠原準クレオール英語、小笠原コイネ日本語、そして小笠原混合

言語があった。これらの言語変種の性格や形成過程を考える前に小笠原の独特な歴史を四つの時代に区分して振り返ってみよう。

第一期、一八三〇〜一八七五年。無人島だった小笠原に西洋と太平洋諸島の人々が定住する「在来島民時代」。十数の言語を母語とする開拓者一世の間で、英語基盤のビジンが発生し、安定ビジンへと発展しないうまま、島生まれの二世がこれを母語として獲得すると、準クレオールに変身する。

第二期、一八七五〜一九四五年。日本人の入植者が来てから、太平洋戦争が終わるまでの「日本化進行時代」。在来島

民が日本国籍をとる。八丈島方言をはじめ、日本各地の方言が混ざり、コイネが形成される。公立学校で二言語教育が実施され、「帰化人」の間でバイリンガリズムが進む。英語をL言語（下位言語）とするダイグロシアが慣習化される。

第三期、一九四六〜一九六八年。「欧米系島民」百数十人と米軍数十人が共に生活する「米軍統治時代」。英語による教育。「小笠原コイネ日本語」の文構造に「小笠原準クレオール英語」の句や単語が大量に取り入れられた混合言語が結晶する。英語を日言語（上位言語）とするダイグロシア。

第四期、一九六八〜現在。返還から現在に至るまでの「日本返還後時代」。英語を含めて、標準日本語以外の言語変種は消えていく傾向にある。

二 小笠原の様々な言語変種

この複雑な歴史をもつ島に多数の言語がやってきて、多数の接触言語を生み出している。まず、島にやって来た人たちの言語を大きく分けると、ヨーロッパ諸言語、オーストロネシア語族の諸言語、日本語となる。ヨーロッパの言語はイギリスとアメリカ英語、ポルトガル語、フランス語、ドイツ

語、イタリア語、デンマーク語、スペイン語を指す。西オーストロネシア語族としてチャモロ語、タガログ語、マラガシ語、ブカ語（ハリア語）が挙げられる。東オーストロネシア語族はハワイ語、タヒチ語、北マルケザス語、ロトゥマン語などのポリネシア諸語、そしてカロリン語、キリバス語、ボナベ語、モーギル語といったミクロネシア諸語の言語もあった。

小笠原に伝わった日本語は本土各地のものだが、中で飛び抜けた存在は八丈島方言である。これ以外に、関東や中部地方、および九州方言の言語的影響と思われる特徴が現在でも聞かれる。なお、小笠原とほぼ同じ緯度にある奄美群島や沖縄からの入植者はほとんどいなかったため、その言語的影響は見られない。

さて、小笠原が生み出したビジン英語、準クレオール英語、コイネ日本語、そして小笠原混合言語はそれぞれどういう性格のものだったのだろうか。

三 小笠原ビジン英語、小笠原準クレオール英語

日本人が入ってくる以前に少なくとも十八の言語を母語と

する人たちが共同生活していた。島を訪れた人の記録を見ると、彼らの共通言語は「ブロークンイングリッシュ」、つまり英語を上層言語としたビジンだったことが分かる。このビジンに関する資料は残されなかったもので、その言語的特徴は不明だが、当時の島民の中に、ハワイ語を母語とする人たちが多くとかポルトガル語を母語とする人たちが多いなどという状況がなかった。英語母語話者を含めて、それぞれの言語を母語とする人は数人程度で、マジョリティーがなかった。だから、入植者一世の間では、「これが小笠原ビジン英語だ」という特徴が共有されていたというよりも、それぞれの人が、自分の母語の影響が見られる英語（ハワイ語なまりの英語、ポルトガル人っぽい英語など）を勝手に話していたと考えるのが妥当であろう。

しかし、皮肉なことに、この「言語的マジョリティーが存在しなかった」という同じ理由が、島生まれの二世の間でクレオール発展に拍車をかけただろう。つまり、ハワイ語の母とポルトガル語の父親との間に生まれた子が何語を最もよく耳にして育ったかという点、ビジン英語だった。この子の両親だけではなく、自分を可愛がった隣のおじちゃん、おば

ちゃんそれぞれイタリア語とチャモロ語を母語としていたので、彼らが日常的に使う言語もビジン英語だった。そして、幼馴染の遊び友達はこの夫婦の子供で、自分と同じようにビジン英語を耳にして育っている。どの言語をとつても母語話者が極端に少なかった。英語の母語話者も多くても一桁だった。島生まれの子供たちが母語としてインプットした言語はバラエティに富んだ小笠原ビジン英語だったので、彼らの頭の中で、あるいは自分たちの間でコミュニケーションをとるといふ共同作業の中で、それをクレオールへと発展させていった。このように、ビジンが安定化しない（個人のバリエーションが均一化しない）ままで、次の世代の母語となる現象を「急速クレオール化」と言う。

厳密に言えば、そこで誕生した言語体系は、標準語と異なるものの、さほど、文法構造が英語と異なるほどのものでもなかったようだ。言語接触によって生まれた言語でありながら、文法構造の完全な再構築が見られないものを準クレオールと言っている。例えば、*子*の発音が「*チ*」や「*ジ*」となったこと、および単数形・複数形や定冠詞・不定冠詞の区別がなくなったのはビジンの影響だろうが、一方、英語の

/w/と/v/の複雑な相補分布や二種類の“*co*”の発音の使い分け、またはクレオール化すると消滅することが多い動詞の過去形が保持されたことなどを見れば、英語の形を残している部分もある。すなわち、小笠原では、英語母語話者は（人数が少なかつたにもかかわらず）言語形成に大きな影響を与え続けたため、程度の軽いクレオール化に止まったと言える。

この準クレオール英語の名残が後世の英語にも見られる（Long 2007: 75, 93）。

四 小笠原のコイネ日本語

西洋と太平洋系の島民が三世代目に入ったころ、日本人の入植者が大量に入り込んできた。最初は八丈島出身の人が圧倒的に多かったが、その後、本土各地から人が移住してくるようになった。日本語の様々な変種（方言）が混ざり合っていて、徐々にコイネへと発展したのである。異なった言語が混ざったときに発生するのはビジンであるが、同じ言語の複数の方言が混ざるときにできるのはコイネである。小笠原でもコイネ日本語ができた（阿部 2007）。

五 英語と日本語が混ざる「小笠原混合言語」

以上、小笠原諸島で生まれた複数の接触言語を取り上げたが、中でもっと不思議なのは、小笠原混合言語である。これは日本語と英語が混ざっている独特なことばである。これはただ単に二つの言語を話者が適当に混ぜている訳ではなく、その混ぜ方を支配する原則があるようだ。

日本語や英語といった自然言語にも文法規則が存在するようには、小笠原の混合言語にも「言えること」と「言えないこと」がある。いくらバイリンガルな人でも、よそから来た人が適当に英語と日本語を混ぜて話したら、小笠原の欧米系島民からは、「そういう混ぜ方はしないよ」と言われる場合が多い。彼らはこうした原則を意識してしゃべっているわけではない。しかし、欧米系島民どうしの会話を聞いていると、文法規則があることが分かる。なお、本稿で用いる「小笠原混合言語」という名称は筆者が勝手に作った言い方である。島ではこうしたしゃべり方に名前が付いているわけではなく、「英語と日本語が混じる話し方」というふうに捉えられているだけである。

欧米島民は小笠原混合言語以外にも、純粋な英語と純粋な日本語を話すこともできるので、彼らはトライリンガル（三ヶ国語話者）とも言うべきである。混合言語は主に欧米系どうして使う言語で、日本本土（内地）やアメリカから来た人に対しては日本語や英語にコードスイッチングする。

以下では、小笠原混合言語の顕著な特徴を見よう。例文は実際の談話からとったもので、ロング&橋本（2005）に掲載されているものである。

①句・節レベルでの英語導入

簡単に言えば、日本語の文構造に英語の部分が混ざっているものである。しかし、英語は単語単位ではなく、句や節ごとに導入されることもある。つまり、英単語をどうつなげば良いかという文法的情報も導入されているのである。次の発話[1]で、昔のホームステイ先の家が台風で水害にあった状況を語っている。この文には、英語の名詞句や前置詞句が含まれている。

[1] Me の sponsor のあろう、何と言うの？ その French door' あろう glass door が割れて、 water が up to the

me などを取り入れているようである。

③数詞

日本語で使い分けが複雑になっているもう一つの品詞は数詞である。ここで英語の使用が目立つ。欧米系島民から、「日本のシガツやヨンカゲツ、ハツカやツイタチ、イツボンやサンピキは非常にややこしかった」のような発言をよく聞く。現在、彼らは日本語（だけ）を話すときでも、数詞を間違えることはほとんどないが、島の人同士で話すときは、使い慣れた混合言語が出る。次の発話[4]では「小学校二年生」を second grade と言っている。発話[5]では、米軍統治時代にカマボコ型兵舎が一軒映画館として使われていたことを語っている。発話[6]では、ジャックウィリアム海岸に十六家族が住んでいたことを思い出している。

[4] 私の娘、まだ、小学校の、だから、 second grade あたりかなー。たぶん。

[5] Movie が one theatre。Quonset house の。それから BTC が one だけ。

[6] Jack William は、うーはいあったよ、畑（え、あんな

knee だった。

また、発話[2]で「欠かさず」のことを never missed と表現している。動詞が英語の文法規則によって活用されている。

[2] (教会へいつも行ってたんですね。) 必ず。もう、 never missed だね。

②代名詞

英語の代名詞が使われるのは、小笠原混合言語における最大の特徴と言える。最も顕著なのは、発話[1]に見られた一人称の me だが、二人称の you もしばしば聞かれる。三人称の him などはこちらほど頻繁ではないが、使われることもある。次の発話[3]でも、一人称代名詞の me を使用しているが、ここでは、文の述語（形容詞）も英語起源の単語になっている。

[3] その時 me sad だったよ。遊べなくなっちゃったもの。みんな忙しい。

欧米系島民が言うには、日本語の人称代名詞を選択するのは面倒くさい。この複雑な使い分けを避けるために、英語の

狭いところ(？) うん、 sixteen families だった。 I was born there, Jack William.

④敬語の不使用

米軍統治下時代に、父島には島の人百数十人と数十人の米兵とその家族、合計二〇〇人弱しか住んでいなかった。身内同士で暮らしていたため、敬語や丁寧語は不要で、あまり使われなくなった。戦前育ちの世代は丁寧語や敬語を使いこなしているが、米軍世代は敬語や丁寧語が苦手だと自ら言う。

筆者が島を訪れているときに、返還前に米国に移り住んでいた元島の人が、数十年ぶりに故郷に帰っていた。そこで、人に紹介されたときに、握手して「ドウダイ」と相手に言っていた。その場に居合わせた幼馴染の人は、返還後の日本社会に慣れていたため、「オマイ、『はじめまして』と見えよ」と注意を促がした。米軍時代は身内同士で暮らしていたため、こうした他人向けの挨拶を使う機会がなかったのである。発話[7]の会話のやり取りで「ドウダイ」が自然に出てきた。発話[8]ではこれをうけて、島民がその意味を調査者に向かって解説している。

[7] (Good morning) どうだい？ (元氣？) 待ってたんだぞ、これ。 Eight o'clock に電話して。

[8] 「どうですか」といつも聞くのが、「どうだい」。それを short にして「どうだい」だよ。「How are you?」返還直後でも、現在でも、日本語でもっとも苦労するのは丁寧な表現やことば遣いだと嘆いている米軍世代の島の人は多数いる。今でも、気をつけていればなんとか丁寧語が使えらるという人でも、緊張したり、あるいは逆に気が緩んだりしているときに、昔のことばがぼろっと出ると言う。長年東京都の仕事をしている人が、上司に腹を立てて、「オマイにむかつく」と言ってしまった、という話を本人から聞いた。米軍世代は年上に向かってても（みんなが身内だったため）「オマイ」（お前）を使うことが普通であった。

発話[9]では、欧米系どうして話しているため、人称代名詞は me とオマエとなっている。「薬を服用する」をどう言うかが話題になっているメタ言語的な発言である。

[9] 「薬トル」言う？ (Me は「薬飲む」と言う。) オマエ「飲む」。Me たちは「薬トル」。

ない。反対に日本語のラ行子音の発音は、英語の /エ/ や /I/ のように訛るのではなく、きちんと日本語らしく発音される。発話[11]で「コピーをとる」と言っているが、発音は日本語のように [kopi] ではなく、米語のように [kapi] になっている。

[11] いちおうこれ、今夜、私 copy とって、ケニーのところに電話して、欲しけりゃ送るぞってね。

同様に、strike (帆を降ろすこと) や tack (向かい風を斜めに受けて船をジグザグに進める) も [sutoraiku] (五拍) や [taku] (三拍) にならず、[straik] や [taek] のように一音節として発音されるのである。これはバイリンガルな人だけではなく、英語が苦手である戦前育ちの欧米系にも見られる傾向である。英語の音節構造だけでなく、日本語にない母音や子音も日本語の文の中で聞かれる。例えば、crack (バカ) や jacket (ミナミイズミという魚) がある [æ] の母音や toothpick (つまようじ) にある [θ] の子音も日本語に存在しない音が使われる。

⑤ 英語からの転移

小笠原混合言語では、日本語の単語でも、英語のように使われることがある。言語学的に言えば、意味や用法の転移が見られるということである。発話[9]の「薬をトル」や「シャワーをとる」は英語の take を直訳したものだと思われる。また、「ケムリの匂いがする」(焦げ臭い、燃えている匂い) や(電話などで)「あなたのところにクル」(「行く」の意味)、そして「自分が人にプレゼントをケレル」(あげる) というような表現が日常的に使われている。次の発話[10]には、「ミル」(会う)と「アウ」の両方が使われている。

[10] But it's been so long. But, classmates? 会った。(Really?) Yeah. From Long Beach, forty years 見なした。

挨拶表現の「マタミルヨ」も興味深い。これは英語の “see you again” を直訳した別れのことばである。

⑥ 原音のままの発音

音声学的にみると、小笠原混合言語の部分は原語の発音を保っていることが分かる。つまり、英語はカタカナ発音では

五 おわりに

以上、小笠原にしか見られない「固有種」の言語を見てきたが、これはもちろん小笠原の大事な文化的財産でもあるが、言語学者にとっても、二つの言語が混ざるときに起こる様々な現象を示してくれる貴重な情報でもある。

【参考文献】

- 阿部新 (2006) 『小笠原諸島における日本語の方言接触——方言形成と方言意識』南方新社
 ロング、ダニエル&橋本直幸 (2005) 『小笠原ことばしゃべる辞典』南方新社
 Long, Daniel (2007) *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. Duke University Press.

(首都大学東京／言語接触論)